５　地域とつながる乳幼児期の教育・保育の推進

○　子どもの生活は、家庭、地域社会、そして就学前教育施設と連続的に営まれています。子どもの家庭や地域社会での生活経験が、就学前教育施設において保育者や他の子どもと生活する中で、更に豊かなものとなり、園生活で培われたものが、家庭や地域社会での生活に生かされるという循環の中で幼児の望ましい発達が図られていきます。

○　したがって、保育計画を作成し、保育を行う際には、家庭や地域社会を含め、子どもの生活全体を視野に入れ、子どもの興味や関心の方向や必要な経験などを捉え、適切な環境を構成して、その生活が充実したものとなるようにすることが重要です。

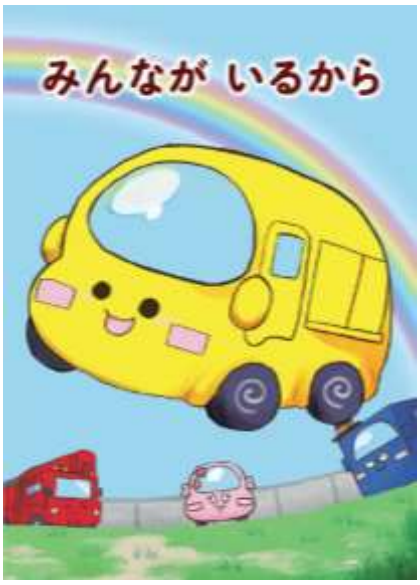
○　さらに、近年の子どもは、情報化が急激に進んだ社会の中で多くの間接情報に囲まれて生活しており、自然と触れ合ったり、地域で異年齢の子どもたちと遊んだり、働く人と触れ合ったり、高齢者をはじめとする幅広い世代と交流したりするなどの直接的・具体的な体験が不足しています。このため、地域の資源を活用し、子どもの心を揺り動かすような豊かな体験が得られる機会を積極的に設けていく必要があります。

（１）復興教育

○　本県の就学前教育における基本方針でも示したとおり、本県の取組として、「いわての復興教育」が挙げられます。これは、前述（p. 38）のとおり、岩手の教育において、通底する理念としているものです。

○　就学前教育において、「いわての復興教育」についてそれだけを取り立てて指導することはしませんが、この教育的価値「いきる・かかわる・そなえる」は、保育者が保育に当たる際に意識しておくべきものです。

「いわての復興教育」絵本『手と手をつないで』
令和４年２月　岩手県教育委員会



「いわての復興教育」絵本『みんながいるから』
令和５年２月　岩手県教育委員会

「いわての復興教育」プログラム

「いわての復興教育」の教育的価値

Reconstruction Education Program of Iwate

震災津波の体験からクローズアップされた教育的価値（いきる・かかわる・そなえる）を再整理しました。

1 いきるについて

- 命の大切さや自然や畏敬の念に関すること。
- 心のあり方、これからの生き方に関すること。
- 心のサポートに関すること。
- 体力の維持・増進など、身体の健康に関すること。

2 かかわるについて

- 家族の絆や家族の一員としての喜びに関すること。
- 互いに助け合ったり、思いを寄せ合ったりする仲間や地域の方々に関すること。
- 災害後の支援活動における県内外や各国間とのつながり（絆）に関すること。
- 地域づくりに関すること。
- 自然とのつながりに関すること。

3 そなえるについて

- 震災津波体験（情報・ライフラインの途絶等）や科学的知見・防災リテラシーを踏まえた防災に関すること。
- 災害時の行動に結びつく判断に関すること。
- 災害を想定した日頃の備えに関すること。
- 非常時に生き抜く知恵と衣食住の技能に関すること。
- 災害について学ぶこと。

「いわての復興教育」プログラム第３版（H31.３岩手県教育委員会）

【事例】地域とのつながり～心のつながり～　　５歳児　５～７月

〈A さんのお庭へ出かける〉　　５月上旬

コミュニティ FM の情報から、地域の方（A さん）の庭の芝桜を見に出かけた。友達と一緒に交通安全を意識して長距離を歩く、地域の方と触れ合う、自然物に触れて心を動かす等、園内の保育ではできないような様々な経験をすることができ、身近な地域への関心をもつきっかけとなった。

お礼の手紙を届けたところ、「今度はアジサイを見に、また来てください」と誘っていただいた。

この A さんとの交流の様子を、カラー写真入りのクラスだよりで知らせたり、ドキュメンテーションで玄関に掲示したりしたところ、保護者も関心をもち、「どこのお宅ですか？」「行ってみたいです」等の反応があった。

〈再びお庭訪問〉　　７月中旬

A さんの庭に到着時、緊張した様子の子どもたちだったが、A さんに案内してもらいながら、庭を進むと、５月に来た時とは違う景色が広がっていて、歓声を上げる。B 児が斜面のアジサイを見て「どうやって植えたんだろう」とつぶやいたので、一緒に聞いてみた。「はしごをかけて植えたんですよ」と教えてもらうと「へえ！」「すごい！」と納得した様子。

A さんはおやつを準備してくださっていて、みんなでお礼を言ってからいただいた。また、A さんご夫妻は前回訪問時の手紙や写真を大切にしていて、持ってきて子どもたちに見せながら一人ひとりにお礼を言ってくれた。

帰りには、アジサイ苗とおやつをお土産にいただき、子どもたちも何度もお礼を言って帰ってきた。お互いが見えなくなるまで手を振り合っていた。

後日、クラスでお礼のプレゼントのうちわを作り、担任が届けに行った。

ドキュメンテーションを介して、保護者同士のやりとりが見られ、体験の内容や、わが子以外のクラスの子の様子にも関心が向けられるようになった。

【この事例からわかること】

◇「お互いが見えなくなるまで手を振り合っていた」姿から、一度きりではなく、交流を重ねたことで、親しみが増し、子どもたちと A さんが互いを思う気持ちが強くなっていることがわかります。子どもたちは、家族以外の人も、自分たちを大切に思ってくれていること、見守ってくれていることについて実感を伴って理解できています。このような体験が「大切にしたい子どもの姿」の「身近な自然や地域社会に親しみ関わろうとする子」を育んでいきます。

◇ ドキュメンテーションやクラスだより等で、交流の様子を保護者に発信したことが、保護者が地域に関心を向けることにつながりました。また、お土産の花苗から、親子で地域を話題にするきっかけが生まれました。

◇ この事例は、「いわての復興教育」の教育的価値の中の、「かかわる」に主に関連している事例です。園が地域の資源をリサーチし、それを意味ある形で子どもたちと出会わせることで、子どもたちを取り巻く地域社会が自分の生活と関わっていることや、そのよさに気付き、大切にしていこうという思いを育むことにつながっていきます。

（２）関係機関等との連携

○　乳幼児の保育に当たっては、家庭や地域社会を含めた子どもの生活全体を視野に入れながら、子どもの抱いている興味や関心、置かれている状況などに即して、必要な経験とそれにふさわしい環境の構成を考えることが求められます。

○　特に年長児ともなれば、園内の環境について熟知し、使いこなせるようになってきていることが多いと考えられます。加えて興味や関心も園内の出来事に留まらず、自分を取り巻く社会に目が向き始める時期でもあります。そうした子どもたちの興味や関心の広がりに合わせ、様々な公共施設等の地域資源を積極的に活用し、子どもの知的好奇心等を満たしたり、さらに高めたりすることが大切です。

○　地域には、子育てに関する相談や学びの場を提供している機関等もあります。本県では、保護者から直接相談を受ける窓口が開設されているほか、県等が行う研修会を修了した子育てサポーター等保護者支援の地域人材育成も行われています。(p. 95 掲載「まなびネットいわて」HP 参照)

○　様々な地域資源を有効に活用するためには、保育者自身が地域における一人の生活者としての視点や感覚をもちながら毎日の生活を営む中で、家庭や地域社会と日常的に十分な連携をとり、一人ひとりの子どもの生活全体について互いに理解を深めることが不可欠です。

【事例】プラネタリウム見学からプラネタリウムごっこへ　　５歳児　７月

〈子どもの育ちと保育者の願いからの計画〉

地域の沼を見に園外保育に出かけた際、少しスリルのある山道が印象深かったのか、園内でも大型遊具を構成して「ここは一本橋だから落ちないようにね。」「小さい川はジャンプで飛び越すよ。」などコースづくりを楽しんでいた。また、沼に住む生き物のイメージでごっこ遊びを展開するなど、園外での体験を自分たちの遊びに取り入れる姿も見られた。園外での共通体験をきっかけに、遊びを様々に広げられるようになってきていた。

園では七夕の季節に合わせ、七夕の歌を歌ったり、星に関する絵本を読み聞かせたりしている。願い事を短冊に託したり、七夕飾りを作ったりすることは年中組でも経験していているが、年長組になった今年は、前述のような育ちを踏まえ、星座に関する絵本や図鑑を保育室に用意し、七夕をきっかけに、より星座や宇宙に関心が高められるようにと願い、近くの施設のプラネタリウム見学に出かけることにした。

〈興味や関心が広がるための施設との打合せ〉

事前に施設と打合せを行い、上映する内容を検討した。施設は園の希望に合わせ、織姫と彦星の物語に触れ、そこから夏の星座について子どもたちの興味や関心が広がっていくような内容を組み立てた。

当日は、暗い空間にドキドキしたり、美しい天の川や夏の星座が広がる夜空に息をのんだりし、時々挟まれる施設職員のクイズも楽しみながら、プラネタリウムを満喫することができた。

〈本物みたいなプラネタリウムごっこをしよう！〉

プラネタリウム見学を終えた翌日、子どもたちは昨日の楽しかった経験を口々に話し、「プラネタリウムごっこをしよう！」と数人が準備を始めた。それぞれに思い思いの星を描いて、それを切り取り、「先生、天井からつるして！」と保育者に手伝ってもらいながら、「寝転がって見るプラネタリウム」ができあがった。

しかし、本物のプラネタリウムの経験から、「暗くしたい」「星はいろんな色に光るんだよ」「北斗七星の形にしたい」など、次々やりたいことが湧き上がってきたようだった。何人か新たなメンバーも加わって、どうしようかと相談が始まった。

その様子を見た保育者は、星座の投影にライトが使えることを知らせた。一人が画用紙に千枚通しで北斗七星の形に穴をあけてライトで照らし、保育室を暗くすると、壁面に北斗七星が映し出された。「すごい！本物みたいだ！」子どもたちは図鑑をもってきて、夏の星座を次々画用紙に穴をあけて表現し始めた。

保育室を暗くしたことで、他の子どもたちも興味を示し始めた。「音楽もいるんじゃない？」「お客さんが見る席も欲しいよね」「織姫と彦星のおはなしもやろう！」と、ペンで透明シートに紙芝居のような絵を描き始める子も出てきた。

７月、まだ学級全体での組織的な活動とまではいかなかったが、イメージを共有し、楽しかった経験をやり取りしながら再現する姿からは、プラネタリウム見学がこの時期の年長児の育ちにつながる体験となったことが伺えた。

【この事例からわかること】

◇ 園の周りにある環境の一つとしての公共施設を利活用している好事例です。年中行事の一つとしてプラネタリウム見学を行い、日常の保育との関連を意識せず、単発で見てきて終わりになってしまうこともありますが、この園の場合は、5歳児の子どもの育ちを踏まえ、この後の育ちも見通しながら計画をしています。

◇ 5歳児は、普段慣れ親しんだ園内の環境だけでなく、園外の様々なもの・ことに関心を向けるようになってきます。園外での共通体験で、楽しいと感じたり、美しさに感動したり、大きさに驚いたり、なぜだろうと不思議に思ったりするなど、様々な感情を学級の仲間と共有することで、共感性が高まり、心動かされたことを共に再現しようとするようになります。これは、「大切にしたい子どもの姿」の「感じたことや考えたことを自分なりに表現する」意欲が高まると同時に、協同性の育ちも促していきます。

◇ 施設職員と事前に打ち合わせをすることで、子どもたちの興味や関心を踏まえて内容を組み立てることができました。そのことが、見学後の子どもたちの活動意欲を一層沸き立たせることにつながりました。

◇ このような地域資源の活用は、指導計画等にも位置付け、計画的かつ柔軟に行っていくことで、子ども達のより豊かな育ちの保障につながります。

○ 県には、事例に挙げたような、子どもが体験的に関わることのできる施設があります。

≪岩手県生涯学習関係出先機関の一部≫

・岩手県立県南青少年の家
・岩手県立陸中海岸青少年の家
・岩手県立県北青少年の家
・岩手県立野外活動センター
・岩手県立図書館

https//www.pref.iwate.jp/kyouikubunka/shougaigakushuu/1006796.html

○　同じく県の生涯学習関係出先機関の一つである岩手県立生涯学習推進センター及び各教育事務所では、家庭教育・子育て支援推進事業として以下の研修等を行っています。

・子育て・家庭教育相談担当者研修会（生涯学習推進センター）
・家庭教育・子育て支援活動交流研修会（生涯学習推進センター）
・地区家庭教育・子育て支援ネットワーク研修会（各教育事務所）

○　これらの研修会は、保育者の他、県や市町村の子育て支援担当者や子育てサポーター、子育て支援センター関係者等が対象のものですが、地域の関係機関とつながることで、視野が広がり、子どもたちにとっても、保育者にとっても新たな学びの展開が期待されます。

岩手県生涯学習情報提供システム
「まなびネットいわて」のＨＰはこちら　→

https://manabinet.pref.iwate.jp/hp/